

化物尽くしの黄表紙にみられる “人間の化物化” について

池田 幸 織

一、はじめに

江戸時代において化物たちが大勢登場する「化物尽くし」の草双紙は、長い期間に亘って途絶えることなく製作されており、人気のあるテーマであった。

「化物尽くし」とは、アダム・カバットが定義したものである。カバットによると、

① 外題あるいは文章のなかで「ばけもの」という言葉が見られること。

② 全体のストーリーを通して化物が主題になっていること。

③ いくつかの違う種類の化物が登場すること。

④ 化物たちのグループのなかに、当時の読者がすでに化物と認識しているもの（見越入道・三つ目入道・大人道・ろくろ首・一つ目小僧・豆腐小僧・雨降小僧・河童（川太郎）・雪女（雪姫）・狸・狐・猫又・青鷲・五位鷲・瀬・貉・土蜘蛛

・ももんが（あ）・天狗・産女・大腕・大足・山男・女の首
・大奴・鬼・鬼女・般若・油嘗め・山あらし・座頭・山姥・
火の玉）が含まれていること^①。

の四つをすべて満たしている草双紙のことで、現在検討できる作品は赤本が三点、黒本・青本が三十点、黄表紙が六十六点ある。

化物尽くしの草表紙の本格的な研究は、一九八〇年代から始まる。加藤康子、神田邦彦、波かおりらは、同人研究誌『叢』誌上で、化物尽くしの草双紙の全体的な流れも視野に入れて考察している。近年の代表的な研究者であるアダム・カバットは『江戸化物の研究 草双紙に描かれた創作化物の誕生と展開』^②で全体像を見ることよってわかる特徴を考察し、まとめている。その中で黄表紙から始まる新しい趣向の一つに「人間（大通）にかなわぬ化物」があるとする。これは化物たちが自分たちよりもうまく化けたりする人間にはかなわない、と自ら勝手に負けを認めて逃げたものであり、そこには化物と人間の立場の交錯、人間の化物化が見てとれる。その他、黄表紙から始まった趣向ではないが「化

物見立て」でも人間の化物化がみられる。

「人間の化物化」に特化した研究は管見では見当たらないが、野口武彦『江戸百鬼夜行』、香川雅信『江戸の妖怪革命』^④、アダム・カバット『ももんが対見越入道 江戸の化物たち』^⑤、門脇大『江戸の見立化物―古今妖物狐心学』、心学の化物』の中に言及があった。

従来、化物尽くしの草双紙の全体的な流れはアダム・カバットを筆頭に研究されている。しかし、先行研究では、化物像の描かれ方に焦点が当てられることが多く、「人間の化物化」の詳しい言及はない。とりわけ、黄表紙に特化した「人間の化物化」について詳述されたものはない。そのため本論文では化物尽くしの黄表紙を対象を絞り、そこにみられる「人間の化物化」やその要因について考察していきたい。

二、人間の化物化とは何か

まず、アダム・カバットが黄表紙作品をまとめた「化物尽くしの一覧表」^⑦を参考にし、「人間にかなわぬ化物」「物見立て」の趣向が含まれている作品を抽出した。以下の十七作品である。画作者・刊行年等の記述については「黄表紙総覧」^⑧の記述によった。翻刻のあるものはその書名等を記し、翻刻がないものは、所蔵先を記し、原本の画像により解読した。

・『化物箱根先』（鳥居清長画・安永七（一七七八）年・『化物箱

根の先（珍獣の館文庫）Kindle版^②）

・『怪談豆人形』（文溪堂作、鳥居清経画・安永八（一七七九）年・『黄表紙百種』）

・『大強化羅敷』（青楼白馬作、北尾政演画・安永八（一七七九）年・東京都立中央図書館）

・『怪物昼寝軒』（市場通笑作、鳥居清長画・安永九（一七八〇）年・早稲田大学図書館）

・『化物鼻が挫』（市場通笑作、鳥居清長画・天明元（一七八二）年・東京都立中央図書館）

・『作意妖恐懼感心』（北尾政美画・天明三（一七八三）年・国立国会図書館）

・『（化物）御家髭松明』（南袖笑楚満人作、「北尾重政画」・天明四（一七八四）年・早稲田大学図書館）

・『嘘無箱根先』（七珍万宝作、歌川豊国画・寛政元（一七八九）年・国立国会図書館）

・『化物夜更顔見世』（桜川慈悲悲成作、歌川豊国画・寛政三（一七九一）年・国立国会図書館）

・『怪物徒然草』（山東京伝作・寛政四（一七九二）年・『山東京伝全集』第三巻^⑩）

・『小□雨見越松毬』（曲亭馬琴作、「北尾重政画」・寛政八（一七九六）年・駒沢短期大学研究紀要^⑪四号）

・『御子様方御好二附 怪席料理猷立』（望月窓秋輔作・寛政八（一七九六）年・国立国会図書館）

・『御子様方御好二附 怪席料理猷立』（望月窓秋輔作・寛政八（一七九六）年・国立国会図書館）

- ・『化物大閉口』（南袖笑楚満人作、歌川豊国画・寛政九（二七九七）年・早稲田大学図書館）
- ・『化物大和本草』（山東京伝作、葛飾北斎画）・寛政十（二七九八）年・『山東京伝全集』第四卷¹³）
- ・『三角雪婦焼耐狐火』腹鼓臍嘶曲』（式亭三馬作、歌川豊国画・寛政十（二七九八）年・国立国会図書館）
- ・『武家物奇談』（馬鹿山人花道作、歌川豊国画・享和二（二八〇二）年・国立国会図書館）
- ・『怪談摸摸夢字彙』（山東京伝戯作、『北尾重政画』・享和三（一八〇三）年・『山東京伝全集』第五卷¹⁴）

（二）人間の化物化の分類

本節では化物たちは何を怖がっているのか、人間の何を化物と見立てているのかに焦点をあてる。対象作品中にみられる人間の化物化を変化（化け様）、退治、知恵・技術、気質、勘違いの五つに分類した。以下、それぞれの具体例をあげながら内容をみていく。

まず「変化（化け様）」の具体例をあげると、『怪物昼寝軒』では「化物は素人が上手にて」とし、「三十振り袖四十島田、衣を脱いで医者とみせ、女形が悪形となり、敵役が愁嘆、色男が半道―」と、若作りや坊さんが医者に変装すること、役者が真逆の役を演じることなどの例をあげ人間の方が化けるのが得意だとしている。このように「変化（化け様）」は人間が行う上手な変化・

変装に化物たちが負けている場面を分類している。

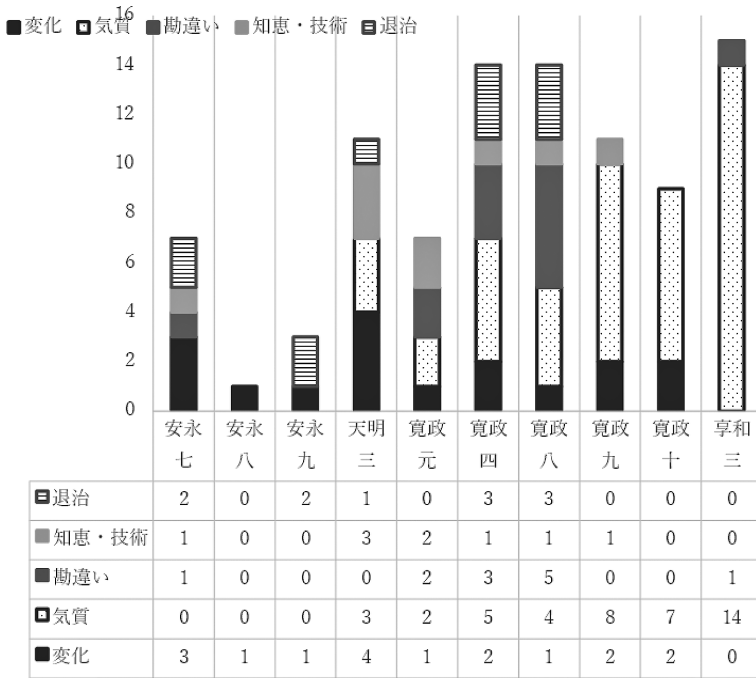
次に「退治」の具体例をあげる。『化物箱根先』では「鼠ばかりとり食らいしに石見銀山を食いし鼠ゆえ大食傷をす」と石見銀山という殺鼠剤で狐はやられてしまったり、化物たちが食い逃げした所を捕まえられている。『怪物昼寝軒』では狸が町へ行き歩いていると、ももんじ屋で人間が猪肉や鹿肉の吸い物を食べているのを見て狸は怖がっている。このように「退治」には、力技の化物退治に近いような実際にやられてしまう恐怖を感じているものを分類している。

三つ目に「知恵・技術」の具体例をあげる。『怪席料理献立』では、見世物に登場する三本足の娘（化物）が義足をつけた四本足のお七（人間）にかなわないと逃げていく。このように人間の「知恵・技術」にかなわないと感じているものを分類している。

四つ目に「気質」の具体例をあげる。『化物大閉口』では花魁の手練手管な様子が千手観音のように描かれ、化物たちは恐ろしがっている。このように「気質」には人間の性格的な部分や行動を怖がったり、化物と見立てているものを分類している。化物見立てを趣向とした作品では画自体も化物のように描かれているものが多い。

最後に「勘違い」の具体例をあげる。『小□雨見越松毬』では勘違いするのは化物たちではなく臆病な人間の嘉三郎である。酒屋の小僧と髪を降ろした乳母を豆腐小僧と産女に見間違えて恐怖している。このように勘違いから化物に見立てているものを分類

人間の化物化の分類別登場数



グラフ1 人間の化物化の分類別登場数

以上、五つに分類した作品をグラフにしたものが「グラフ1」である。前半期、「怪物昼寝軒」（安永九）までは「変化（化け様）」や「退治」に怖がっている化物たちが多く見られる。しかし中期に入り、「作意妖恐懼感心」（天明三）から人間の氣質を化物に見立てることが始まり、「嘘無箱根先」（寛政元）以降は人間の化物化が多様化していく。そして後半期になると「化物見立て」の趣向が多くなっていくに伴い人間の氣質を化物に見立てたものが大半になっていくことが明瞭である。

三、鬼と人間

本章では鬼が登場する黄表紙を対象とし、化物と比べて人間に敵わないと感じる部分に差異があるのかについて考えたい。

『黄表紙総覧』^⑤を参考に「鬼退治」「鬼退治譚」「鬼」「鬼ヶ島」「酒呑童子」「茨城童子」「桃太郎」などを趣向とする作品から、人間に敵わない描写や人間の化物化がある作品を抽出し、以下の十四作品を選定した。

・『光明千矢前』（鳥居清満画・安永四（一七七五）

年・『語文（日本大学）』一六一卷¹⁷⁾

・『風流 桃太郎手柄話』（不明・安永五（一七七六）年・東京都立中央図書館）

・『朝比奈嶋渡』（富川吟雪画・安永五（一七七六）年・国立国会図書館）

・『桃太郎後日晰』（朋誠堂喜三二作、恋川春町画・安永六（一七七七）年・『黄表紙百種』¹⁸⁾

・『大鏡御存知荒事』（富川吟雪画・安永六（一七七七）年・立命館A R C）

・『桃太郎かんの鳥』（富川吟雪画・安永六（一七七七）年・東京都立中央図書館）

・『気散夢物語』（朋誠堂喜三二作・安永八（一七七九）年・『漢谷近世』一七卷¹⁹⁾

・『鬼子宝』（鳥居清長画・天明元（一七八一）年・『語文（日本大学）』一六一卷²⁰⁾

・『頼光邪魔人』（唐来参和作、北尾政美画・天明五（一七八五）年・『唐来三和（シリーズ江戸戯作）』²¹⁾

・『桃太郎昔日記』（北尾政美画・寛政元（一七八九）年・東京都立中央図書館）

・『山入桃太郎昔晰』（菊舟画・寛政四（一七九二）年・東京都立中央図書館）

・『猿尻金平牛芳』（桜川慈悲成作、歌川豊国画・寛政五（一七九三）年・東京都立中央図書館）

化物尽くしの黄表紙にみられる“人間の化物化”について

・『初宝鬼島台』（十返舎一九作、北尾重政画・享和三（一八〇三）年・東京都立中央図書館）

・『昔話桃太郎伝』（南柚笑楚満人作、樹下石上画）・文化二（一八〇五）年・立命館A R C）

(一)「鬼」が登場する黄表紙と化物尽くしの黄表紙比較

鬼を題材とした黄表紙の中での人間の化物化は『桃太郎後日晰』の嫉妬に狂い角が生えたお福（氣質・化物見立て）、『鬼子宝』『桃太郎昔日記』『山入桃太郎昔晰』で鬼たちが厄払いや豆を投げられたこと、毒団子を食わされたこと（全て退治）の四点のみだった。化物と鬼では人間に敵わないと思う理由の種類に大きく差がある。前章で分類したように化物たちは幅広い理由で人間に敵わないと思っているが、鬼たちは相撲や殺戮など種類はあれども全作品で力技に敵わないと感じている。

どんな人間に敵わないのかをみると、桃太郎が七点、源頼光と四天王が三点、朝比奈、怪童丸、彦七（『太平記』の登場人物）、厄払いが一点ずつある。化物たちは特定の豪傑に退治されるのと同様に普通の人間にかなわないことも多かったが、鬼たちは『鬼子宝』をのぞく十三点が豪傑にやられており、対峙する人間の種類が限られている。話の主役も豪傑たちで、彼らは主体的に鬼退治に向かっている。このような鬼が豪傑によって力技で退治される傾向は、黒本青本の化物退治談に見られる傾向に近い。アダム・カバットは化物尽くしの黒本青本の二／三を占めていた化物退

治談の趣向は黄表紙に続いているとしつつも、最も異なる部分は一人間が積極的に化物退治をしないことだという。黄表紙の「人間(大通)にかなわぬ化物」の趣向では、焦点が化物に移っており化物が自ら勝手に負けを認める場合が多いとしている。このように黒本青本の特徴に近い一方で、化物尽くしに比べると少ないが、鬼が逃げる絵柄もみられる²³⁾。これは、黒本青本には見られず、黄表紙から始まったものである。たとえば、『桃太郎昔日記』では桃太郎に退治されるが殺されずに鬼たちが逃げる描写が描かれている。

ここで鬼の黄表紙に人間の化物化がほとんど見られなかった理由を考察したい。筆者は①話の視点が豪傑(人間)側にあり、豪傑が主体的に異界に鬼退治に向かっていること②登場する化物(鬼)の種類が少ないことの二つが原因だと考える。化物尽くしの黄表紙では化物たちに焦点が当てられ、彼らは住処である箱根の先から江戸へと出てくることが多い。そして江戸で暮らす様々な人間を見て、かなわないと勝手に負けを認める。すなわち、舞台を人間の世界に置き、化物たちの視点を通して人間社会をみることで人間の化物化は生じているのである。そのため豪傑(人間)の視点を通して異界での退治を描く鬼の黄表紙は化物尽くしとは真逆にあたり、実際にやられる恐怖を化物に与える「退治」に分類されるもの以外の人間の化物化は生じがたいと考えられる。

また鬼の黄表紙では、豆まきや嫉妬を角が生えた鬼に見立てる

など鬼に関連する化物化が見られた。それと同様に、化物尽くしの黄表紙でも見越入道が高下駄を履いた人間に見越されたり、狐が夜鷹の若作りという化け様に驚いたりと化物の得意分野で比較をし、人間にかなわないとするものが多く見られた。そのため、人間の化物化の種類は登場する化物の数に比例すると思われる。以上、鬼が登場する黄表紙と化物尽くしの黄表紙の比較から得られた二点は、人間の化物化が生じる根本にあたるものだと考えられる。

四、人間の化物化の流れについての考察

本章では、化物尽くしの黄表紙にみられる人間の化物化はなぜそのような流れになったのか背景について考察をしていく。

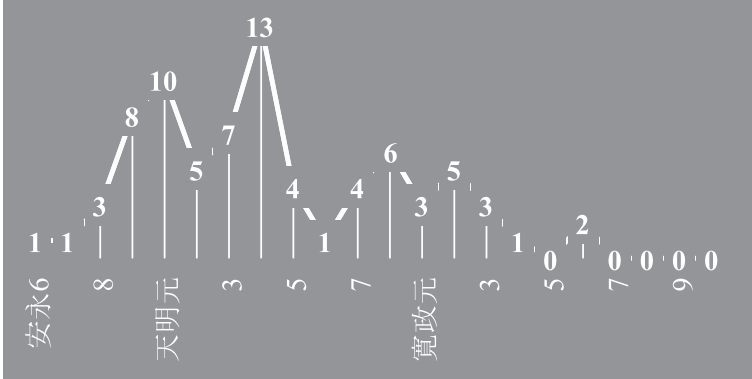
(一) 大通の流行廃り

前半では大通にかなわないとする作品や人間の化物化の種類は「変化」や「退治」が多く見られる。そこから人間の化物化の種類が多様化するの、大通の流行廃りが影響していると考えられる。

「大通」は安永六年頃から流行したもので、富貴で派手、文化を牽引する粋の代表である。しかし安永末年頃からそうした大通のばからしさに対する反省や批判、また戯作者たちの自らが真の通人や大通であるという自信から「大通とは」をめぐる通論議が

大通という言葉が出てくる黄表紙の数変化

——大通という言葉が出てくる黄表紙



グラフ2 大通という言葉が登場する黄表紙の数変化

化物尽くしの黄表紙にみられる“人間の化物化”について

流行し理念としての通への反省が行われた。その結果、通の意識は豊かな知識をひけらかさない、控えめな態度こそ通であると変化し、天明期には大通ではなく通という言葉が新しい意味を持つて使用されるようになった。天明末期には通の文学への反省が起こり、戯作は従来の滑稽性の回復へと向かった。水野稔はそうした反省がその後の洒落本などかなりの変化をもたらしたとし、京伝の『繁千話』『傾城買四十八手』（寛政二）を例にあげて「特殊な事実のうがちなどへの目をそらして、人間や人間関係一般の類型的観察や描写への大きな開眼を示していた」と述べている。

次に「大通」という語が黄表紙に現れた数を比較すると【グラフ2】のようになる。これを見ると、大通という語が安永・天明期に流行し黄表紙に取り上げられていたことがわかる。この結果は先に述べたような作者たちの通意識の変化や大通たちが寛政の改革によって社会的地位を失っていたことも影響が大きいと考えられる。

『怪談豆人形』（安永八）から『嘘無箱根先』（寛政元）までは大通にかなわないことや大通を目指すことを趣向とする作品が刊行されており、大通の流行と概ね合致していることがわかる。それらの作品の中では、大通は野暮な化物たちと対置される存在であった。前半の作品では化物が人間の「変化」や「退治」などに恐れる描写よりも化物⇨野暮それに対するのは大通であるという意識や大通を目指す過程などが重要な要素として描かれている。しかし『嘘無箱根先』以後の作品になると、大通ではなく市井の

様子や普通の人間を化物化する傾向が多い。

このように通の意識、戯作者達の反省や大通の社会的地位の喪失により「大通」という存在が廃れたことよって、新奇性や流行を取り上げることが大切だった黄表紙に大通が取り上げられることが少なくなり、①そもそも趣向の一つである物語の重要な要素が無くなった。その穴を埋めるように②普通の人間や類型を描くことに焦点が移り、登場する化物それぞれの得意分野と比較しながら人間を化物化することで、化物化の多様化に繋がったと考えられる。

(二) 寛政の改革が与えた影響

後半になると、今まで主人公であった化物たちが登場しない「化物見立て」の趣向が増え、人間の気質を化物として滑稽に描いたものが多くなる。「化物見立て」の趣向増加の一因として、寛政の改革の影響があると考えられる。

まずは佐藤至子『江戸の出版統制…弾圧に翻弄された戯作者たち』²⁷⁾『山東京伝―滑稽洒落第一の作者』²⁸⁾を参考に黄表紙への影響をみていくこととする。

寛政の改革は天明七年から寛政五年にかけて行われたものである。寛政二年五月には享保七年の出版条目を元に規制の範囲を拡大した町触（出版統制）が出され、草双紙も規制されることとなった。当時、黄表紙は鎌倉時代など昔の時代に置き換えて当世のことを不謹慎に書いたもので、多数の大人の読者を獲得する読み

物となっていた。しかし草双紙は子供の読み物という建前があったので、子供向けの作品であれば咎めないという内容であった。寛政三年には、黄表紙や洒落本界を牽引する存在になっていた京伝の洒落本三冊が見せしめのように絶版されることとなる。佐藤は京伝の作品に限らず寛政の改革をばさんで作品が大きく変質していったとし、改革の影響により教訓を取り込み、以前のように限られた内輪の仲間たちで楽しむものから大衆が楽しめるものへ変化していったと述べている。またこの頃の新たな黄表紙の作風について、鈴木俊幸は京伝の黄表紙や版元の蔦屋重三郎の動きを元に「新たな作風を歓迎した『今日の見物』」に向けて新たに開発していったものが「教訓を平易に絵解きするような作品群」ではないかと述べている。²⁹⁾

これらの寛政の改革の影響を踏まえると佐藤や鈴木が対象とした作品とは異なるが、化物尽くしの黄表紙でも大衆向けや教訓を取り込むことが意識され、それが気質の化物見立てと結びつき増加に繋がったのではないかと考えられる。

例えば『化物大和本草』（寛政十）では、強欲な人を「利欲の鳥」に見立てている。そして「中有に迷ひ苦しむ」事になるため「この鳥にならぬやうに心掛け給へ」と強欲さを諷めている。そして最後には「怪しきを見て怪しまざれば、怪しき事なしといへる古語を思へば、みな我が心の迷ひなり。たゞ人の心の妖怪ほど恐ろしきはなし。皆の子供衆、とかく心の化物を退治すべし。合点か〜。」と締めくくる。『怪談摸摸夢字彙』（享和三）では、

最初に「リツシンベンニマヨフトカキテバケモノトヨム化物トミルハオホカタ心ノ迷ナリ」²²と作者が作った虚字の解説で教訓を説き、本編では人間の気質を化物に見立て戒めている。

これらに共通するのは、心の迷いが化物を生み出すという教訓を述べている点である。これは当時流行していた心学を取り入れたものと考えられる。

心学とは石田梅岩を祖とし儒教を根本として神道・仏教を融合し、民衆の多くに親しまれる形態で平易に説いた庶民教育である。儒教を根本としていたことから幕府の正学である朱子学と抵触しなかつたため、寛政の改革下で大流行していた。寛政二年には山東京伝の心学の教訓を盛り込んだ『心学早染艸』が大ヒットし、その後も心学を盛り込んだ作品は多く刊行された。

心学書で取り上げられる化物について、門脇は、

二つの系統に大別できる。一つは人の恐怖心がありもしない化物を誕生させるというものであり、いま一つは人の心情や行動を化物に見立てるといふものである。なお、両者は厳密に区別できるものではなく、ともに述べられることも多い²³。

としている。これら二種類の心学書における化物は、日々の暮らしにおける教訓を述べるという意図で書かれている。化物見立ての黄表紙が述べている教訓は、これらの心学を通した化物・怪異への見方と同じではないだろうか。しかし一方で、黄表紙の化物

見立ての作品には文字絵や洒落言葉から作り出した化物など娯楽性が高く教訓性が感じられない場面が含まれていたり、洒落や地口も多く見られる。そのため、心学を通した化物・怪異への見方を利用しながらも心学書のようにかしまつてはいない。

以上のことから、寛政の改革を機に大衆や教訓を意識する作品を生み出す中で、化物見立てという趣向は当時流行していた心学と結びついた。日常における平易な教訓を滑稽に伝えるために多種多様な人間の気質を化物に見立てることが行われ、人間の気質の化物化が進んだと考えられる。

五、おわりに

本論文では、化物尽くしの黄表紙にみられる人間の化物化について、詳細を明らかにすることを目的としてきた。対象とした十七作品に見られた人間の化物化を「変化」「退治」「知恵・技術」「気質」「勘違い」の五種類に分類することにより、人間の化物化が大まかな流れがあることを明らかにできた。また鬼が登場する黄表紙十四点を取り上げ、差異を考察したところ、①人間生活を化物の視点を通すことで人間の化物化は生じること、②登場する化物の種類と比例するという人間の化物化の根本的な部分を確認することができた。そして「変化」「退治」↓化物化の多様化↓「気質」の化物見立ての増加という流れは大通の流行廃り・寛政の改革（出版統制）の二つの影響が大きいのではないかと仮説を

たて考察した。それにより、化物たちが人間世界に進出すること
で始まった人間の化物化は、現実世界の流行や制約に大きく影響
を受ける中、黄表紙の画と文両方を備える特徴を利用し、滑稽で
わかりやすくより幅広い人に届くように商品価値を上げるために
変化してきたものであると明らかにすることができた。

注

- (1) アダム・カバット『江戸化物の研究 草双紙に描かれた
創作化物の誕生と展開』岩波書店、二〇一七年、p.42。
- (2) 前掲注(1)
- (3) 野口武彦『江戸百鬼夜行』ペリかん社、一九八五年。
- (4) 香川雅信『江戸の妖怪革命』河出書房新社、二〇〇五
年。
- (5) アダム・カバット『ももんが対見越入道 江戸の化物
たち』講談社、二〇〇六年。
- (6) 門脇大「江戸の見立化物―古今妖物狐心学」、心学の
化物」(『怪異・妖怪文化の伝統と創造―ウチとソトの視点
から』45、二〇一五年、p.175-189)
- (7) 前掲注(1)、pp.132-146
- (8) 棚橋正博『黄表紙総覧』青裳堂書店、一九八六―二〇〇
四年。
- (9) 蘭藍汰訳『化物箱根の先(珍獣の館文庫) Kindle版』、
二〇二〇年。
- (10) 幸堂得知校訂『黄表紙百種』博文館、一九〇九年、国立
国会図書館デジタルコレクション。
- (11) 山東京傳全集編集委員会編『山東京伝全集』第三巻、ペ
リかん社、二〇〇一年。
- (12) 清田啓子「翻刻 曲亭馬琴の黄表紙(2)」(『駒沢短期
大学研究紀要』四号、一九七六年、pp.19-81)。
- (13) 山東京傳全集編集委員会編『山東京伝全集』第四巻、ペ
リかん社、二〇〇五年。
- (14) 山東京傳全集編集委員会編『山東京伝全集』第五巻、ペ
リかん社、二〇〇九年。
- (15) 対象とした十七作品全てに人間の化物化が見られた訳で
はない。「人間にかなわぬ化物」の趣向が含まれる作品は、
従来の黒本青本の化物退治に近い①力技の化物退治(『御
家髭松明』『化物夜更顔見世』『腹鼓臍嘶曲』)、力技ではな
く人間の化物化がみられる②人間の方が化物(『化物箱根
先』『天強化羅敷』『怪物昼寝軒』『作意妖恐懼感心』『嘘無
箱根先』『怪物徒然草』『怪席料理献立』『化物大閉口』)、
明確な人間の化物化はないが力技でもなく③大通にかなわ
ない(『怪談豆人形』『化物鼻が挫』)の三つに分けること
ができる。
- (16) 前掲注(8)
- (17) 荒川真一「(翻・複)〈資料紹介〉草双紙における酒吞
童子説話の利用―東京都立中央図書館加賀文庫所蔵『光明

- 千矢前』・国立国会図書館所蔵『鬼子宝』翻刻と紹介」
 『語文(日本大学)』一六一巻、二〇一八年、pp.47-82)。
 (18) 前掲注(10)
 (19) 植木智広「黄表紙『気散夢物語』翻刻と注釈」(『澁谷近世』一七巻、二〇一一年、pp.104-131)。
 (20) 前掲注(17)
 (21) 鈴木俊幸編『唐来三和(シリーズ江戸戯作)』桜楓社、一九八九年。
 (22) 前掲注(1)、p.180
 (23) アダム・カバットは前掲注(1)で「面白いのは、黒本青本のなかにはこのような逃げる化物の絵柄が見当たらない」と述べている(p.161)。
 (24) 中野三敏『戯作研究』中央公論社、一九八一年。「通」の発生」を参考にした。
 (25) 水野稔「通意識の生成と展開」(『国文学：解釈と鑑賞』26(1)、一九六一年、p.103)。
 (26) 園田豊「黄表紙の「大通」：その作品と用例」(『語文研究』30・131)、二〇一一年、pp.213-225)を参考に、筆者がグラフ化した。
 (27) 佐藤至子『江戸の出版統制：弾圧に翻弄された戯作者たち』吉川弘文館、二〇一七年。
 (28) 佐藤至子『山東京伝―滑稽洒落第一の作者―』ミネルヴァ書房、二〇〇九年。
- (29) 前掲注(27)
 (30) 鈴木俊幸『江戸の読書熱 自学する読者と書籍流通』平凡社、二〇〇七年。
 (31) 前掲注(13)
 (32) 前掲注(14)
 (33) 棚橋正博『山東京伝の黄表紙を読む 江戸の経済と社会風俗』(へりかん社、二〇一二年)など。
 (34) 前掲注(6)
- ウェブサイト(データベース)
 ・立命館大学アート・リサーチセンター「ARC 古典籍データベース」
http://www.dh-jac.net/db/1/books/search_postgr.php
 ・国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/>
 (いけだ・さおり 二〇二一年度本学卒業生)

化物尽くしの黄表紙にみられる“人間の化物化”について